

第10話 青い階段



すでに午前一時だった——。

何時に寝て何時に起きたのか。どこが一日の始まりで、どこで一日が終わるのか。日々、夜どおし働いているとわからなくなってくる。

アヤノは深夜営業の食堂で働くことは厭いとわなかったが、こうして休みの日になると、どうしていかわからなかった。目覚めれば夜で、溜たまっていた雑用を済ませると、もう零時をまわっている。会いたい友達にもなかなか会えなかった。

どうしても会いたいときは、少しだけ仮眠をとって、無理にでも昼に起きる。でも、休みの日はつつい、いつもより何時間も多く眠ってしまった。気づくと深夜になっていて、そんな時間に普通に起きている友達は——ひとりだけいた。

市子いちしだ。

市子しもしは下北沢しもきたざわに住んでいて、アパートの部屋でアクセサリーをつくる仕事をしている。ひと晩中、

起きていることが多い。アパートは商店街のすぐ裏手にあるので、こんな時間でもすぐに商店街へ出て、下北沢なら食事ができる店を選べる――。

反射的に部屋を出て歩き出していた。市子にも会いたいけれど、食事もしたい。というより、体が外へ出て行くことをもとめていたらしい。

アヤノの住んでいる笹塚ささづかから下北沢までは早足で歩いて二十分くらいだった。ほとんど一直線に南下していくのが近道だが、住宅街を貫く一本道なので心もとない。それで、夜中に市子に会いに行くときは、歩きながら携帯で市子に電話をつなぎ、「いま、そっちに向かっている」「もうじき井ノ頭かしら通り」などと実況中継をしながら歩いていくのだ。

歩きながら携帯を取り出し、いつもどおり市子に電話をかけて、耳に当てた。

「はい」

眠たげな声が聞こえてきた。

「起きてる？」とアヤノが訊くと、

「アヤノだよね？　いまだどこ？」

市子の声は、すぐ隣にいるかのようにだった。

「もうじき、井ノ頭通り」

「雨、降ってない？」

「雨？」

アヤノは空を見上げたが、雨どころか、星も雲も月も見えなかった。じつに、そっけない空だ。

「降ってないよ」

「今日、休みの日だっけ？」

「そう。起きたら夜中で、どこも行くところないし」

話しながら井ノ頭通りの歩道に出た。車が行き交っている。

「あ、いま井ノ頭通りに出たでしょ」市子が嬉しうれそうに云いった。「車の音がよく聞こえる」

アヤノは「いま渡つてるところ」と横断歩道を渡り、「いま渡りきった」と報告すると、車の音を背にして、ペースを変えずに歩きつづけた。

「ねえ」と市子が云う。「前から思ってたけど、こういうの、よくないんじゃない？ 話に夢中になって、あぶないよ」

「大丈夫。意識はこっちにあるから」

「じゃあ、アタシと話してるのは、ついで？」

「うん、そうだね」

会話は絶やさないようにしていた。言葉が途切れると、急に周囲の暗さがのしかかってくる。

「ここのところ、会ってなかったよね？」

「そう。アタシ、少し仕事をお休みしてたの

——」

市子はため息まじりに答えた。

「そうなの？」

「ちよっと、なんだか疲れちゃって——ていうか、オーダーが途切れちゃったっていうのが本当のところなんだけど、このままだとアパートの家賃払えなくなるし、そろそろ、先のことも考えようって——」

「あ、じゃあ、いま仕事してたんじゃないんだ」

「うん。寝てた——ていうか、ちよっと待って。

そうだ、アタシ、四国に帰ってたんだ」

「え？」

「帰省してるの。そんな状況だから、実家に戻っ

て両親と話さなきゃと思って——」

「え、ちよつと待って。じゃあ、市子、いま下北沢にいないんだ？」

「いないよ」

「だって——井ノ頭通りがどうのこうのって」

「ごめん。寝ぼけてた。アヤノの電話に起こされて、いつもの気分で、実家に戻ってたの、すっかり飛んでた」

急にアヤノはあたりの気温が二度くらい下がったような気がした。なおさら歩く速度が速まる。

まだ住宅街の只中ただなかで、商店街に出るまで少しあつ

た。何か話さなきゃと思うのに、何を話していいか思いつかない。自分を取り巻く空間が歪ゆがんだよううで、いつもは、こうして話しているうちに、市子のアパートに辿たどり着くのだ。「あ、いま到着。アパートの階段をあがってる。もうドアが見えてるよ——あ、市子が見えた」

市子がアパートのドアをひらいて出迎えてくれるのが常だった。話しながら市子のいるあかりのついた部屋に近づいているのが何よりの安心だっ

た。

それが、「いま、四国」と聞いて、いきなり頭上の電球がぷつりと切れてしまったようだった。ひとりだけ取り残された気分だ――。

「ちよっと待って」とアヤノは頭の中を整えた。

「まだ切らないでね、電話。商店街に出るまで、お願い」

「うん、わかってる」

市子はアヤノが暗い夜道を歩くのが何より苦手であるのを誰よりも知っていた。

「アヤノは最近、誰かに会った？」

「うん。このあいだ、ハルカに会って、びっくりした。彼女、すっかり女優っぽくなっちゃって」

「もう、デビューしたんだっけ？」

「ううん。これから映画を撮るんだって」

答えながらアヤノは（なんて暗い路地裏なの）と誰かに文句を云いたくなってきた。アヤノは生まれつき鳥目なので、暗いところはほとんど真っ暗にしか見えない。

「映画かあ。すごいよね、ハルカ」

「でも、いろいろあるみたいで、悩んでた」

「ていうか、アヤノの方はうまくいってるの？」

「わたし？ それって——仕事のこと？」

「あれ？ 仕事以外に何かあるんだっけ？」

「え？」

アヤノは自分の頭の中がまったく整理できていないことに気がついた。市子の云うとおりだ。アヤノはいまの食堂で働き出してから、まわりの友人たちに、食堂のこと以外、話したことはなかった。以前は人並みに色恋沙汰ざたを相談したものが、こここのところの「うまくいく、いかない」は仕事かかに関わることに限られていた。そのはずなのだが——（ええと、そうだった？）と自分でもなんだかよくわからなくなってきた。

いや、でも、ひさしぶりに市子に会って話をしたくなつたのは、仕事のことじゃない。仕事のこととで、迷いや悩みは本当に何もなかった。

「ちょっと、大丈夫？」

黙ったままのアヤノを案じて、市子が声を大きくした。



「うん、平気。ちょっと考えてた」

「何を？」

「わたし、何を考えてたんだっけって」

「ということとは、何か考えてはいるわけね」

「たぶんそう」

そのとき、アヤノの脳裏に、かつて自分の食堂でハムエッグ定食を食べていた田代たしろの姿が浮かんでいた。

「あれ、ちょっと待って」

立ちどまってあたりを見まわす——。

「今度は何？」市子の方が不安そうな声をあげた。

「なんかね、わたし、道に迷っちゃったみたい」

「え？　だって一本道だよ、商店街まで」

「うん。そのはずなんだけど、いつまでたっても商店街に辿り着かないし——なんだか見たことのない——なんだろう？　変な店があつて——妙に暗い店。でも、あかりがついてる」

「何？　食べもの屋？　バーか何かじゃない？」

「違うなあ」

アヤノはその店に近づいて看板を確かめた。

「あのね、へイバラギ」ってカタカナで書いてある。市子、知ってる？　へイバラギ」って店」

「知らないよ。どこ歩いてるの？」

「わからない」アヤノは首を振った。

しかし、突然あらわれたそのへイバラギ」という店は、どこことなく、いまのアヤノの気持ちにすっと入り込んでくる印象があった。

\*

「ごめん。ちょっと、いったん電話切るね」

女性の声が店先から聞こえ、イバラギは作業机から顔を上げると、そこに神妙な顔をした小柄な女性が立っているのを見出した。みいだ知らないひとだ。初めてのお客さんである。

「いらっしやいませ」

小さく低く声をかけた。

女性はその声にはっとなり、声が聞こえた方に目をこらすも、彼女の目には、外の暗さと同じくらい店の中が暗く感じられた。

「おじゃまします」

消え入るようにそう云うと、声のする方に軽く会釈を試みせた。

イバラギはいつもそうしているように、客の方を見るともなく見た。そして、（たぶん）と思う。（たぶん、あのひとは、うちが何の店なのかかわからないのだろう——）

イバラギはけんしょうえん腱鞘炎で痛めた親指の付け根をさすっていた。

「ええと——あの」  
めずらしく自分から声をかける。

「うちはですね——」  
「古道具屋さんですよね」

アヤノはそう云って店の棚に並んでいる品々を——本当はよく見えなかったが——興味深そうに眺めた。

（あれ？）とイバラギは意表をつかれた。

女性客のほとんどは「アンティーク屋」という言葉を選ぶ。もしくは「骨董屋こつどうや」だろうか。が、イバラギとしては自分の店はそのどちらでもなく、

なんと呼ぶのが最もふさわしいか自分でも判断がつかなかった。しいて云えば「古道具屋」ということになるだろうか。ひとまずは、そう決めていた。

なにしろ、店に置いてある商品が古いものであることは間違いない。ただし、自分としてはそれらが現役の道具として、なんらかの新しい役割を担っているのではないかと夢想してきた。あくまで夢想であることは自分でも承知していて、その夢想をいささか強引に押し通しているのが自分の店なのだと、なんとなくそう思っていた。

一方、アヤノは自分はいま何か見知らぬ物語の中に取り込まれてしまったのではないかと身構えた。

（だって、もう少しで商店街だったのに——）

こんな夜中に商店街でもないこんなところで店をひらいているなんて、いかにも怪しい。

じゃあ、自分は夢を見ているのか——と思う。

なにしろ疲れていて、すぐに眠ってしまったし、起きた実感もあまりないまま、外へ出て市子と電

話で話し始めた。だいたい、市子が四国に帰省しているというのも妙な話だった。「絶対、実家には戻らない」といつも云っていたのに。

「あの——」

アヤノは少しずつ目が暗さに慣れてきて、作業机を前にしたイバラギの顔をぼんやりと見ていた。「あの、これは——そのなんとというか、夢ではないんですよね？」

「はい？」とイバラギは動揺を隠しながら、つとめて平然と応<sup>こた</sup>えた。

（なんと鋭い——）

この店が自分の夢を支えに成り立っていると考えていたところだったし、いきなり「これは夢ですか」と訊かれて、「はい、これは僕の夢なのです」と答えるのもどうかと思うが、あながち間違いではないのだった。

「ええ、云ってみればたしかに夢です」

そう答えていた。

「ああ、やっぱり」

アヤノはイバラギの答えに大いに満足した。と

どうか、本当は、もしこれが現実だったらどうしよう、と怖おそれていたのである。暗い店の奥に右手に湿布を貼はった——そこだけ変に白く浮かんで見える——男の人が一人で店番をしていて、棚に並んでいるものは、よく見えないけれど、なんとなく古色蒼然そうぜんとしていた。すべてが夢の中のように、でなければ、起きていることの意味がわからなかった。

しかし、イバラギは「やっぱり」と顔をほころばせたアヤノに、別の感情を刺激されつつあった。  
(ついに——) と思ったのである。

いつかこういう日がくる、とイバラギはやはり夢想しつづけてきた。自分の考えや行動は、ほとんどの人の目に奇異に映る。でも、いつかこうしたことを理解してくれる人が現れ、しかも、それが女性であれば、もしかして、その人こそ、自分が探しもとめてきたパートナーに成り得る人かもしれない。

ただの「理解」ではなかった。それが「やっぱり」の一言に集約されている。「やっぱり」とい

う言葉が自然と口をついて出るということとは、この人もまた長いあいだ自分と同じような考えを持ち、なかなか理解されないことを分かち合う相手を探しつづけてきたに違いない。

「でも——」とアヤノがいま一步、イバラギの作業机に近づいて云った。「ということは、わたしと——その——あなたのお名前はなんでしょうか？」

「あ、僕はイバラギといいます」

「あ、お店の名前ですね。イバラギさん——そのイバラギさんとわたしは同じ夢を見ているということなんでしょうか」

「そう——」

イバラギはかつてないほど心臓が高鳴るのを感じていた。それにしても、「同じ夢」とは、またなんと核心をついた言葉だろう。そうなのだ。人生を共にする相手とは「同じ夢」を共有する必要がある。これほど適切な言葉はない。

「そういうことだと思います」

イバラギは迷わずそう答えた。いささか声が震

えていただろう。

「どうしちゃったんだろう、わたし」とアヤノは目を伏せ、その視界の隅に、イバラギのかたわらに何かがあるのを捉えた。思わず、視線をそちらに移す。

イバラギはアヤノの視線の行方を敏感に察知し——そんなことも稀有なことだったが——「あ、これはですね」と座っている椅子の横に積み上げられたものに手を当てた。

「これは、階段です」

「階段？」

「ええ。正確に云うと、階段の踏み板というんでしょうか。一段、二段とのぼっていくときに踏みしめる、あの板の部分です。たまたま、知り合いの家が解体することになりました、もう要らないというから、いただいできたんです。これはきつと売れるな、と思ひまして」

「階段の——その踏み板だけをですか」

「そうです」

イバラギはかたわらに積み上げられた踏み板か



ら一枚取り上げて云った。

「全部で十四段あります。せっかくですから、下から順に番号を振って、ここにほら——」そう云ってイバラギは、横幅六十センチほどの板きれの隅に鉛筆で「14」と書いてあるのを見せた。

「これは十四段目です。あと一段で二階にあがる最後の段ですね」

「二階建ての家だったんですね」

アヤノはその踏み板に自然と目が吸い寄せられた。

（これはまたなんとという夢なのかしら）とアヤノは小さく首を振った。いかにも夢らしい展開だ。よりにもよって、階段の踏み板だけを売っているなんて。

気づくと、時計の針は午前二時に近づこうとしていた。

店の壁に飾られたその時計は、よく見ると秒針が二本ついている。これもまた、夢の中に登場するアイテムとしては申し分ない。面白いので、いちおう訊いてみた。

「あの、この時計は、どうして秒針がふたつついてるんでしょう？」

（なんと）とイバラギは心の中で叫びたくなった。いままで誰ひとりとして、この時計に秒針がふたつあることに気づかなかつた。「その時計は売り物ですか」と質問した客もあつたが、その客でさえ、秒針がふたつあることに気づいていなかった。

「それはですね」とイバラギはやや声をうわずらせて説明を始めた。「それは、二台で正しい時計」といひまして、二台で一台の時計をまわしているんです」

「二台で？」

「ええ。もともと、この時計はどうしても一日に十五分ほど遅れてしまう時計だったんです。そこで、別の時計のムーブメントをもうひとつ仕込みまして、どうにか秒針をふたつまわせるようにしてみました。ただし、その追加した時計は、どうしても十五分ほど進んでしまう時計で、僕の考えでは十五分遅れる時計と十五分進んでしまう時計

が出会えば、ちょうど正しい時刻になるのではないかと——」

「なるほど」

アヤノはいちいち夢の中で起きることがおかしく、(夢の中だから)と思えば、どんなに突飛なことでも「なるほど」と理解できた。

「二台が力を合わせて正しい時間を示しているわけです」

(そうなのね)とアヤノは感心すらしていた。プラスとマイナスが出会うと誤差がゼロになる。あつちを向いた人とこつちを向いた人が出会うと、二人のあいだにはちょうどいい均衡が生まれる。

必ずしも同じ方を向いていなくてもいいのである。そう思ったら、なんだか急に気持ちが悪くなった。

でも、きつと目が覚めたらいま考えたこともすべて忘れてしまう。そういうものだ。何か大事なことを夢の中で見つけたはずなのに、目覚めたら何ひとつ覚えていない。(そうなのね)と感心した思いだけが、なんとなく胸の中のだこかに残像みたいにある——。

(覚めなきやいいのに) と思った。こんなに面白い時間が現実にあつたら、どんなにいいだろう——そう思った。

\*

同日同刻——。

黄色いタクシーに乗った田代——またの名を名探偵シュロは、運転手の言葉に誘われ、アヤノがいるという食堂へよつかどに到着した。

頭上の空に星はない。

黄色いタクシーが走り去る音を背中に聞き、シュロはしばらく立ち尽くしたのち、おもむろに入口のガラスの引き戸から食堂の中を覗いた。のぞ

カウンターの中に女性がいる。

一人、二人、三人——。

三人だった。運転手の話では四人のはずだったが、そうなると一人足りない。しかし、勘のいいシュロにはこの先に起きることが瞬時に見てとれた。同時に気が抜けて楽になり、まるで常連客の

ように引き戸を引いて食堂の中にはいった。

「いらっしやいませ」

やはり三人しかいない。たまたま、いまの時間だけいないのか、それとも今日は休みをとっているのかわからないが、運転手の情報を信じるなら、ここにいないもうひとりアヤノであることはま  
ず間違いなかった。カウンターの中に立つ三人は  
一瞥で「違う」と判断できる。

次の一瞥で壁に掲げてあるメニューをひとつお  
り把握した。(よし)と声を押し殺してひとつ領  
き、カウンターのなかの誰かに訊かれる前に、

「ハムエッグ定食」

と声をあげた。

\*

同日同刻——。

黄色ではなく夜空の色をしたタクシーに乗る松  
井は、散々、逡巡したあげく、ついに意を決して、

〈東京03相談室〉の番号に電話をかけた。が、「か

けるか、かけるまいか」と人が見ていたら呆れる<sup>あき</sup>ほどの逡巡とは裏腹に、松井はまさか可奈子<sup>かなこ</sup>が電話に出るとは思っていなかった。食堂で話したときに詳しく聞いていたのだ。オペレーターは何人もいて、それでもひっきりなしにかかってくる電話に対応しきれない——と。

だから、たまたまかけた松井の電話に、ちょうどよく可奈子が出る確率は非常に低い。

(でも) と思った。

もし、電話が可奈子さんに通じたら——そして、もし、願いを叶えて<sup>かな</sup>くれる神様というものがこの世にいるのだとしたら、松井の「もういちど一緒に食事を」という願いはきつと叶えられる。運命というのはいくつもある難関をひとつ突破した途端、ものは、いくつもある難関をひとつ突破した途端、女神が微笑<sup>ほほえ</sup>んでくれるものなのだ。

一見、悲観的でありながら、その実、誰よりも楽観的な松井はそう信じた。

だから、一度目のコールが通話中となり、二度目のコールで「はい、こちら〈東京03相談室〉で

す」と返ってきた声が可奈子のものであるとわかったとき、松井は、これで「一緒に食事」が叶えられると確信した。

ところが、

「ごめんさい。今日は先約があるんです」

松井の胸中で息苦しいほどふくれあがっていた「運命」の二文字に、大きなバツテンが無情にも打たれた。

やはり、今宵の空に輝く星はひとつもない。

\*

同日同刻——。

撮影所の〈小道具倉庫〉には二階に非常口があり、ミツキは一人になりたくなったときは、非常口から外へ出て、新鮮な空気を吸いながら階段の途中に腰をおろす習わしだった。

今宵もまた非常口にエスケープしたくなる時間が訪れ、ドアをあけて踊り場に立つと、冷たい鉄の階段が青く染まっていた。

空を見上げる。

星も月もない。おまけに普段ならドアをあけた途端に連動して灯る非常階段のランプが切れていった。

階段だけではなく、非常階段のあたりに滞留している空気そのものが青い。当然のようにミツキも青い空気に染まり、いつもどおり階段の途中に腰をおろすと、しばらくその青さに浸っていた。

(煙草が吸えたらな)と思う。

こういうとき、何をして間をもたせればいいのかわからなかった。いつもなら携帯電話を取り出すところだが、その電話をかけるまでの時間をどうにかしたいのである。

なんというか、すぐに電話をかける気にならな  
い――。

でも、じきに午前二時で、そろそろ、浩一君は起き出して、新聞配達に出かける準備を始める頃だ。ぼんやりしていると出かけてしまう。でも、いま電話をすると、ちょうど「あと五分眠りたかった」という気の毒なことになる。だから、あと



五分。五分間だけ時間をやり過ごして、電話をかけてみよう。

ミツキは何を話したらいいか、頭の中で練習してみた。

話したいことはあるけれど、まだまとまっていない。というか、自慢ではないが、頭の中の混乱がうまくまとまったことなど一度もなかった。

いつでも自分の頭の中はあっちを向いたりこっちを向いたりして、それを浩一君に話すことで、少しずつ整理してきた。彼は何も云わない。というより、彼もまた話すことが支離滅裂で、しかしどういうわけか、他人の話であれば整理ができた。いつでもわたしは彼の話を整理してきたのだ――。

だから、彼がわたしの話を聞いて、うまくまとめてくれるのではなく、彼に話すことで整理するしかなかった。ということとは、結局、自分で整理しているのだけれど、そのためには、わたしの話を黙って聞いてくれる彼の存在が必要だった。

云いたいことのひとつはそれだ。

浩一君、わたしにはやっぱり、あなたという人

が必要みたいです——。

でもね、結婚というのはどうなのかなって、どうしても足踏みしてしまう。結婚はやっぱり人生の一大事で、そう易々とは決められない。

ただ、運命っていうのは、自分で決めるものではなくて、自分で決めなかったことの方が不思議と長続きしているように思う。いまの仕事だってそう。わたしは大道具の仕事をしたくてここへ来たのに、この〈小道具倉庫〉に足を踏み入れたら、いつのまにかこうなっていた。

あのね、浩一君。云いたいことのもうひとつは、その「運命」のことなんだけど、最初に浩一君にインタビューの仕事で会ったとき、わたしの質問にもものすごく真摯しんしに答えてくれたの覚えてる？ 最初から話に脈絡はなかったけれど、あのととき浩一君、「カラスは死んだ人の魂かもしれない」って云ってた。「東京にカラスが集まってくるのは、ここで沢山の命が失われたからだ」って。「カラスは東京を懐かしんでやってくるんだ」って。そう云っていた。覚えてないでしょう？

わたし、ほとんどそのときのその言葉だけで、  
ここまで——あなたと結婚するかどうか考えるところまで来てしまった。

この指輪がこうして抜けなくなってから、まあ、  
これでいいのかな、と思う日もあったり、本当に  
それでいいの？　と思う日もあったり。

わからない——。

ミツキは青い階段の途中に座ったまま首を振つ  
た。

五分が経<sup>た</sup>っていた。